

私は「何の人」か

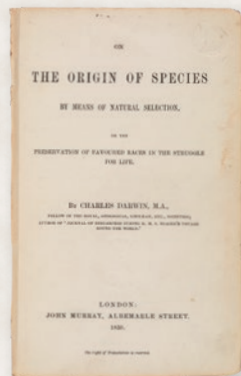
文学部哲学専攻 准教授 田中泉吏^{たなか せんじ}

学生の時分から今日に至るまで、自分の専門分野の説明を面倒に感じてきた。「哲学」というだけでも厄介なのに、「科学哲学」である。何か得体の知れない、わけのわからないことをやっている人間だと思われて敬遠されるだけならまだマシで、下手に興味をもたれて詳しく聞かれると、さてどこから話してよいものかと難儀する。かつてお世話になった科学史家の先生は、「専門はガリレオです」と言えば、周りはそれで話をやめて、以降は「ガリレオの人」で通用するので楽だと仰っていた。自分もプラトンやデカルトなどの専門家であつたら同じ手管が使えたのに、と思わなくもない。

そう言えば、私は「何の人」なのだろうか。害虫観の歴史についての本を書いた先輩は、冒頭でゴキブリに少し言及しただけで「ゴキブリの人」と言われたらしい。そのときはうらやましいと思った。自分が何者でもないまま終わることを恐怖していたからである。

私が学生時代から一番付き合ひの長い「何か」を挙げるとすれば、ダーウィン進化論だろうか。しかし私は「ダーウィンの人」には程遠い。しかも最近は興味関心がどんどん広がって、「何か」を定めるのがますます難しくなっている。もしかしたら、それはそれでよいのかもしれない。今はそんなふうに思うようにもなってきた。

「カントなど読むくらいなら、ダーウィンを読め」とは、かつての指導教員の言である。それで哲学の文献と同じくらいか、それ以上に科学の文献に親しんできたので、まさか自分が哲学専攻の教員になろうとは思ってもいなかった。とはいえ、慶應義塾には科学哲学の伝統がある。他学部から物怖^{ものおそ}じせずゼミに飛び込んできてくれる学生もいる。思い起こせば、私がダーウィン進化論に感じた魅力の一つは、それが何にでも適用できるという普遍性をもっている点である。同じ思いを抱く学生がいても不思議はない。いつか、いろいろな学部の学生が集まる日吉の授業などで、『種の起源』と一緒に読んでみるのも面白いかもしれない。



慶應義塾図書館所蔵
『種の起源』初版本標題紙

談話室

室

教員によるエッセイコーナー